無涯塾師範ブログ

壬卯文月 6 日

無涯塾師範　廣瀬敏男

犬養毅(木堂)の世界に学ぶ

居合道について思いを巡らせるとき犬養毅の言葉を思い出す。

木堂は第 29 代の内閣総理大臣(昭和 6 年)で、昭和 7 年 5 月 15 日夕刻 5 時 30 分、総理官邸で山岸宏海軍中尉らの凶弾に斃れた。所謂5・15 事件である。

木堂翁は、高い教養を持ち、高雅な品格の書を残している。それは、長年にわたって漢詩を学び修めた教養の賜物である。

以下、小学館のウイークリーブック「日本の総理」による。

＝犬養は木堂と号し、書道家としても高名であった。議会の合間は新聞記者と懇談するか揮毫するかのどちらかであった。

犬養は「出鱈目の極意」と言っていた。「出鱈目」とは飾り気のない「天真」(無邪気さ)であり、これを究極の境地とし、滲み出る「気韻」(高い気品)を重んじていた。「字は手の芸ではなく面の芸だ。面の皮が厚ければ誰にでも書ける」という犬養の言葉は、書の巧拙にとらわれない姿勢を示したものである。「書の巧拙は技術に属し、品格の高卑は天分に属する。運筆が如何に巧みでも、技巧が如何に妙でも、品性の卑しい人は崇高な文字などできぬ」と犬養は言う。

さらに「品性が高尚でも、技術を学ばねば、品性も写し出す事が出来ぬ」とも説いた。＝

居合道の真理を探求する者として木堂翁の書に対する姿勢はまことに傾聴に値する。居合の稽古練磨を通して我々の目指すところは「天真」であると思う。

即ち「気韻」。居合道人は高い品格を目指さなければならない。私は芭蕉の高弟で京都嵯峨野の落柿舎の創設者去来の揮毫額「気如韻」を部屋に掲げている。

犬養翁は、書は字の芸ではなく面の芸だとも言っている。居合道に置き換えれば小手先の技ではなく人間性の業といえよう。書の巧拙にとらわれない木堂翁の姿勢を居合道に求めるとすれば、相当高い境地を目指さなければならない。

「書の巧拙は技術面に属し、品格の高卑は天分に属する」の件でも「品性の卑しい人には崇高な文字などできぬ」と翁は述べているが居合を学ぶものとして考えさせられるものがある。そして、「品性が高尚でも、技術を学ばねば品性も写し出すことはできぬ」とも。やはり、普段の稽古鍛練の重要性を説いている。

昭和 58 年、故額田範士九段から「真如」の揮毫を戴き「君の居合は素直な居合である。邪な剣にならぬ様今の気持ちを忘れない様に」と励まされたことを思い出す。

今、私たちの課題は、居合道とは自分を表に出さない「節制の美学」と「人間性の向上」、「気韻の探求」であろうか。　了